

第7節

盲導犬パピープロジェクト



島根あさひ訓練センターで行っている「盲導犬パピープロジェクト」は、
受刑者がパピーウォーカーとなり、盲導犬の育成にかかわってもらうという取り組みです。
事業準備が始まって10年が経過し、
このプロジェクトで育ったパピーから盲導犬が誕生しています。
また、パピー期に訓練士がかかわることで育成課題の解明が進むなどの成果も現れ、
実り多いプロジェクトとなっています。



パピープロジェクトの 目的と使命

●プロジェクトの目的

島根あさひ訓練センターで行っている「盲導犬パピープロジェクト」は、PFI (Private Finance Initiative : 民間資金等活用事業) を活用した法務省の社会復帰促進を実現する事業の一環で、受刑者(この節では「訓練生」という)にパピーウォーカー(PW)の役割を担ってもらうというものです。このプロジェクトは、当協会にとって3つの意義があります。

第1は、盲導犬育成プロセスにおけるPW不足の解消です。これは盲導犬育成頭数の増加につながります。

第2は、盲導犬育成施設がなかった中国・四国地域初の施設として盲導犬の育成、視覚障害者リハビリテーションの拠点になります。

第3は、社会の皆様からの支援で成り立っている当協会にとって、恩返しの実業であり、犬による社会貢献の可能性を広げられます。

当協会は、PFI運営会社から島根あさひ社会復帰促進センターに隣接する盲導犬訓練センターの無償貸与を受け、「盲導犬パピープロジェクト」業務を受託し実施しています。契約期間は17年半です。

●プロジェクトの3つの使命

盲導犬パピープロジェクトは、「プリズン・ドッグ(刑務所の犬)」といわれ、アメリカでは1980年代から行われていますが、日本では島根あさひ訓練センターが初めての試みです。また、海外では介助犬や地雷探知犬などでの成功例はありますが、スタート当時、盲導犬での成功例はあまり報告されていませんでした。

日本初のプリズン・ドッグ、PFI事業での挑戦事業には3つの使命があります。それは、受刑者にとっても、地域にとっても、視覚障害者にとってもメリットのある「Win Winプログラム」であることです。

①受刑者の再犯防止への貢献

自己評価の低い受刑者が多い中、盲導犬の子犬を飼育するという社会貢献の機会を与えることは、自暴自棄になりがちな受刑者の自己肯定感を高め、心の修復をはかり社会復帰への希望を見いだすことにつながります。

②地域社会への貢献

盲導犬パピー育成活動を中心にして地域ぐるみの社会貢献を実践することにより、閉鎖的であった刑務所と地域の共生・協働につながります。「コミュニティー・プリズン」という考えが、受刑者の社会復帰を支え、地域の活性化を促していきます。

③盲導犬育成事業への貢献

PW不足の解消とパピー時期に訓練士がかかわることで育て方に対する知見を得ることができ、盲導犬育成頭数の増加につながります。また、中国・四国地域初の盲導犬育成施設として視覚障害者支援の拠点ができました。



日本初のプロジェクト誕生の 経緯

島根あさひ社会復帰促進センターは、日本で4番目の「PFI刑務所」で、ゼネコン大手の大林組が中心となっている民間運営会社と国との協働で運営されています。このプロジェクトの発案者は、大林組PFI推進部副部

長（2005年当時）で、民間運営会社の初代総括責任者となった歌代正（うたしろ ただし）氏です。歌代氏は、『犬が生きる力をくれた（大塚敦子著）』を読んで、「受刑者が介助犬を育成することで自己肯定感が増し、改善更生への効果が顕著に出てくること」を知りました。そして、PFI刑務所でもプリズン・ドッグを実現したいとの依頼を、日本盲導犬協会が受けることになったのです。

国内では前例のない領域に踏み出すことは、当協会にとってとても大きな決断でした。とりわけ訓練現場では大きな議論になりました。そして、当協会の吉川明（現・理事）が「島根あさひ訓練センター開設準備室室長」となり、具体的に動き出すことになりました。2007年（平成19年）3月、米・ニューヨークの6か所の刑務所で活動している組織「パピー・ビハインド・バース（PBB：Puppies Behind Bars）」を歌代氏と吉川らで訪ね、殺人などの重刑の刑務所内での訓練風景を見学し、受刑者たちとも言葉を交わしました。その訪問に大きな衝撃を受け、プロジェクトの仕組みができあがっていきました。

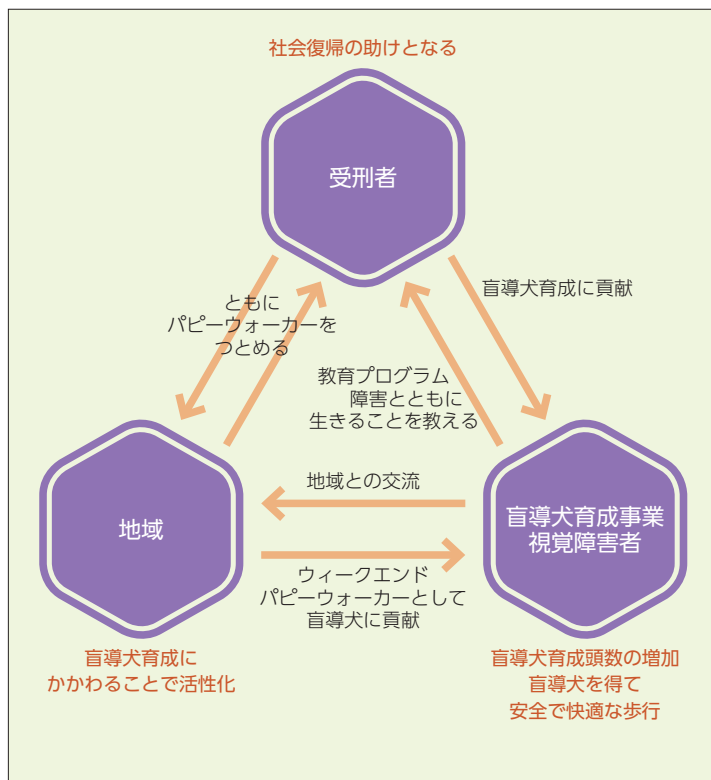
このプロジェクトで一番の問題点となったのは、パピー時代に重要な「社会化の不足」でした。それを補う

ために、週末は地域のウィークエンド・パピーウォーカー（ウィークエンドPW）とともに過ごすこととしました。訓練生との情報交換は「パピー育成手帳」で行うことにしました。このアイディアは幼稚園の連絡帳から生まれたものです。のちに、このプロジェクトの成果につながっていきます。

また、刑務所ゆえの問題もあります。たとえば、リードの保管場所と保管方法です。自殺防止は刑務所にとっては重要な責務ですので、こうした「長尺物」の管理は慎重にならざるを得ません。さらに犬のおもちゃやドッグフードもそうした対象になります。

こうした問題点をクリアするために、実際に犬を3頭連れていき、起床から就寝までの1日の流れをシミュレーションしました。「食べ物を吐いた」「運動中に犬が走って逃げた」「夜に犬が発病した」「食事・入浴・職業訓練時の犬の置き場所は」など、検討事項は山ほどありました。最も手間をかけたのが「盲導犬パピー育成テキスト」、つまりこのプロジェクトのマニュアルづくりです。そこには、具体的なパピーの世話やしつけの仕方だけでなく、盲導犬の役割や歴史、刑務所でパピーを育成する意義などの事業理念も述べられています。

プロジェクト3つの使命



「盲導犬パピープロジェクト」スタートまでの歩み

2007年3月	アメリカのパピー育成活動を行っている刑務所を視察
2007年4月	パピープロジェクト委員会発足
2007年8月	日本国内の刑務所を視察
2007年7月～2008年7月	パピープロジェクトの内容と実施方法、社会復帰促進センターにて使用するパピーの備品、受刑者用のテキスト等についての検討会議を計9回実施
2008年6月	パピープロジェクトの発表記者会見とシンポジウムを開催
2008年9月	社会復帰促進センター内で受刑者とパピーがともに生活した場合を想定したシミュレーションを2頭のパピーと1頭の成犬を使用して実施
2008年10月	社会復帰促進センターが開庁、訓練センターの運用開始
2008年11月	パピーを飼育する受刑者の選定基準についての協議開始
2009年3月	面談内容を参考に主・副担当を仮決定
2009年4月	2週間の試行期間の後に正式に主・副担当としてパピーの飼育がスタート

3 プロジェクトの内容と成果

2009年(平成21年)4月13日、盲導犬候補のパピーの委託式が行われました。当日は井上幸彦理事長から3頭のパピーが、訓練生の代表者に抱きかかえるように手渡され、一人ひとりと握手をしていきました。

島根あさひ社会復帰促進センターでは、生活と作業・職業訓練をともにする訓練生を1ユニット(60人定員の寮)として収容する方式となっています。盲導犬パピープロジェクトを実施するユニットは「6Cユニット」、点字点訳の職業訓練(全国視覚障害者情報提供施設協会が指導)で、1年間点字を学び、子犬を育てながら過ごすことになります。

●パピープロジェクトの実施状況

初年度となる2009年は、3頭のパピーを12人で担当する形で始まりました。2期目は5頭、3期目は8頭、それ以降は基本的に6頭を36人で担当しています。

毎週、月曜日には「一般改善指導」(90分)と呼ばれる教育プログラムが行われます。ウィークエンドPWから朝戻ってきたパピーを、午後、訓練センターから6Cユニットに連れていき、6Cユニットの多目的ホールで「パピーレクチャー」を行います。あとは、訓練生に飼育を任せます。そして、金曜日の午後に引き取られたパピーは、週末ウィークエンドPWと生活することになります。

「パピーレクチャー」では、盲導犬パピー育成テキストにそって、盲導犬訓練士から訓練生にPWの役割、

パピーの褒め方、抱き方、パピーの飼育方法(健康管理、排泄、食餌など)、しつけ、遊ばせ方、リード歩行などを実際に体験させて教えていきます。

また、毎月1回、盲導犬育成事業や視覚障害リハビリテーション(60分~90分)についての講義があります。内容は盲導犬育成事業について、視覚障害について、盲導犬ユーザーの講演、視覚障害者の誘導法、補助犬法についてなどです。毎年、5月頃には盲導犬ユーザーの須貝守男氏に、盲導犬クロスとともに横浜から来ていただき講話をお願いしています。須貝さんはこんな話をされました。

「30歳代で自分が失明するとわかったとき、まっさきに頭に浮かんだのは“役立たずの人間になってしまう”ということでした。そんな絶望から目を開かせてくれたのはテレビのひとコマ。電話で寂しい子供の話し



委託式。パピーを抱くと自然笑顔になる訓練生 ©大塚敦子



パピーレクチャーで必要な知識を ©大塚敦子



プロジェクトの要となるマニュアル

※8点は『(刑務所)で盲導犬を育てる』(大塚敦子著 岩波ジュニア新書)より出典

相手になっている女性、そして女性は病院のベッドに寝たきりのシーン。厳しい状況でも何かに貢献できる、“自分の居場所をつくっていこう”と。須貝さんの話は、訓練生の心に深く染みていきます。

パピーは6か月齢で、社会化トレーニングを目的とした盲導犬訓練所での1週間の預かり訓練を行い、さらに8か月齢で、基本訓練および社会化トレーニングを目的として2週間の預かり訓練を行います。

●修了式での訓練生の変化と感動

こうして、翌年の1月末に「修了式」が行われます。委託式同様に、井上理事長が式典に参加し、育てていただいたパピーを引き取り、修了証書を贈ります。訓練生たちは、パピーを抱きしめ、目には涙があふれます。訓練生たちは次のような感想を伝えてくれました。

「人は立場や環境を超えてお互いを信頼し合えるん

だ、ということを教えていただき、ありがとうございました」「パピーたちのことは一生忘れない。かけがえない財産として、これから生きていきたい」「1つ目、信頼する喜び、それに応える喜び。2つ目、役に立つ喜び。3つ目、達成する喜び。これらの喜びを通して、今後社会に復帰した後の人生に役立てたい」「パピーたちとともに、自分たちも新しいステージに旅立たなくてはならない」「犬が嘔吐したため、夜通し面倒を見た。自分も両親に愛されて育ったことを思い出した」

こうした訓練生の言葉から、教育目標である「セルフ・エスティーム(自己を肯定し尊重する心)」が築かれている様子がうかがえます。犬たちの持っている力のすごさ、盲導犬パピープロジェクトの意義が深く感じられます。2014年出所者の再入所率は全国平均の18.5%を大幅に下回り、4.7%になっています。



飼育状況をパピー育成手帳に記録 ©大塚敦子



居室でも一緒に過ごす



運動場を走る！ 走る！

©大塚敦子



リード歩行練習

©大塚敦子



運動時間にふれあう訓練生と犬

©大塚敦子



子犬だった委託式から修了式が近づく頃には精悍に

©大塚敦子



修了式。
涙ぐむ訓練生も多い

●心をつないだパピー育成手帳

社会復帰促進センターの訓練生とウィークエンドPWをつなぐのは1冊のノート「パピー育成手帳」です。この手帳に訓練生は、毎日欠かさずパピーの飼育状況を記録しました。初めは事務的な連絡内容でしたが、数か月を過ぎた頃から変化が表れました。飼育に対する戸惑い、喜び、そして何よりもパピーによせる深い愛情が文面にあふれます。心の垣根が取り払われ、「新たな絆」が育まれていきました。

1頭のパピーを介して喜びを共有しあうのです。「地域との共生」とは難しいことではなく、こうした人と人との「心のキャッチボール」なのだと教えられました。

4 問題発生の原因究明とそれに対する対策

●盲導犬候補のパピーとしての課題

こうして順調に進んでいるように見えていた盲導犬パピープロジェクトですが、1期、2期のプロジェクトを修了した犬に対して、盲導犬訓練を始めた訓練士か

ら「プロジェクト犬は他の訓練犬と違う」という声が出ました。その内容は、「他の犬と遊ぶのが下手である」「名前を呼んでも来ない、喜求性が育ってないのではないか」「人を見て態度が変わる」「排便コントロールができていない」などです。1期、2期のプロジェクトを修了した犬から、盲導犬になれた犬はいませんでした。

大きな課題の発生です。3つの使命のうち、当協会にとって最も重要な盲導犬育成への貢献に黄色信号が点滅したのです。われわれは検証を始めました。

「パピーレクチャー」を行った訓練士からの報告は、マニュアルにそって研修を実施したか否かで、その成果は訓練生の成長に力点が置かれていました。パピーの心の成長の評価が抜けていたのです。また、週末の一般家庭でのパピーの過ごし方に関しては、ウィークエンドPWに任せきりでした。

こうした問題点の解決のため、まずは訓練士による観察・調査を始めました。それによると、パピーは社会復帰促進センター内で月曜日から金曜日まで、整然とした環境でスケジュールどおり、おとなしく過ごします。しかし土日は、ウィークエンドPWのもとで、



『盲導犬くらぶ』第58号でも紹介したパピー育成手帳。1頭の犬を介して心が通い合います

どちらかといえば甘やかされて自由に遊ぶことが多いのです。これは普段かわいそうだから、せめて週末はいろいろな体験をさせて楽しませてあげようという、ウィークエンドPWの親心だったようです。しかし、そのギャップが大きく、ダブルスタンダードになっていないか、との指摘が訓練士からあがりました。

また、社会復帰促進センターでも、訓練士が点字などの職業訓練中は、パピーが遊びに誘っても訓練生はパピーの誘いを無視するしかないため、喜求性が育ちにくいのではないかという指摘もありました。

●パピーへの幼児教育実施

そこで、社会復帰促進センター内とウィークエンドPW宅でのギャップを埋める役割を、島根あさひ訓練センターが担うことにしました。また社会復帰促進センターには、火曜日から木曜日の昼間に、促進センターからパピーを連れ出して訓練を行う申し込みをしました。

訓練士ができるだけ多くの時間パピーを観察し、1頭1頭に必要な社会化を行っていきました。そうした中から、月齢に応じた成長、盲導犬になるためのパピーのふるまい方などを教えサポートする、いわゆる「幼児教育」を実施していったのです。さらに、パピーの担当職員と訓練士が情報交換を密にすることで、訓練士は訓練方針を的確につかめるようになりました。

その結果、盲導犬訓練の成功率は50%まで向上しま

した。1期から9期までの成果は次の通りです。

1期3頭→盲導犬なし、PR犬1頭

2期5頭→盲導犬なし

3期8頭→盲導犬2頭、繁殖犬1頭

4期6頭→盲導犬3頭

5期6頭→盲導犬3頭、PR犬1頭

6期6頭→盲導犬3頭

7期6頭→盲導犬1頭、繁殖犬1頭、TPQ犬1頭

8期6頭→島根あさひ訓練センターにて訓練中

9期6頭→パピープロジェクト実施中

このように、現在までに盲導犬12頭、繁殖犬2頭を作出しています。

当協会にとって、訓練士によるパピー観察がこれが初めての機会でした。パピープロジェクトにより、パピー期対応の重要性が明確になり、これ以降、当協会では担当訓練士によるPW指導に一層力を入れていくこととなります。

2014年(平成26年)のIGDFセミナー東京大会では、このパピー教育の取り組みが発表されました。そして、さらにデータは蓄積され、得られた知見は、2017年のPW向け指導書『パピーウォーキングテキスト』へと集約されていきます(第1章第2節49ページ参照)。パピー工程の改善は、確実に盲導犬合格率向上に寄与し始めています。



島根あさひ社会復帰促進センター「盲導犬パピープロジェクト」については、左の2冊でも詳しく紹介されています

『PFI刑務所の新しい試み』(島根県立大学PFI研究会編 成文堂)
『〈刑務所〉で盲導犬を育てる』(大塚敦子著 岩波ジュニア新書)